

平和文化研究 第44集 (2024年)

# 日本の民主主義教育の黎明期

～一生徒の記憶に拠る実態報告～

山口 康子

長崎総合科学大学

長崎平和文化研究所

# 日本の民主主義教育の黎明期

## ～一生徒の記憶に拠る実態報告～

山口康子

### 概要

敗戦後の日本の学校教育は、どのように民主化されたのだろうか。

本稿は、たまたま昭和九（1934）年七月に生まれ、新制度六三三四制学校教育の黎明期を体験した一生徒の記憶の記録である。日本の民主主義教育の嚆矢といえる新制度・新制高等学校に焦点を絞り、それに先立つ、国民学校・小学校時代を簡潔に記し、幼年時代と大学・大学院時代は割愛した。

日本の民主主義が根底から揺らでいるかに思われる今、発足当初の初心の実態は、それなりの意味があるものと考えられる。

### Ⅰ まえがき

人は、時も所も環境も自ら選ぶことなく出生する。そして、たまたま生まれ落ちた時代・社会・境遇の下、時の流れの中で生きる。

たまたま、昭和九年（1934年）に生まれた私は、日本の教育制度の様々な変革の始まりを経験し、その中で育つことになった。これは単に私個人の問題ではなく、同年に日本で生まれた全ての人に共通するのだが、同じ教育制度の展開の中に居ても、誰しもが同様な経験をするわけではない。一人一人、決して他とは重ね合わせられない、それぞれの軌跡を辿って生を終える。米寿を過ぎた今、振り返って、私は太平洋戦争（一般に「第二次世界大戦」というべきなのか、当時は「大東亜戦争」と呼んでいたと記憶する）の敗戦によって生まれた学制「六三三四制」の申し子とも言える生を辿ってきたのではないかと考えるようになった。戦前、小学校が「国民学校」と改称され、子どもたちが「少国民」となった一期生だし、戦後の「新制中学校」の一期生であり、又、いわゆる「小学区制」で実施された「新制高等学校」の実質的な一期生で

もある。現在の「共通テスト」の最初の形「進学適性検査」の第一回受験生でもある。この通称「進適」がなかったら、私は大学に進学することはなく、現在の私もいないだろう。

「六三三四制」の最後の「四」の大学生活も、新設の「教養部（教養課程）」の実質的一回生、大学当局も、今思い返せば、様々な試行錯誤のさなかにあった。大切に抱えて防空壕に逃げこんでいた「教科書」の墨塗りも体験した。

単に一児童・一生徒・一学生の記憶ではあるが、書き遺すことに何らかの意味があるのかもしれないと考える次第である。

私が学校教育を受けていた期間は、子どもと大人の区別が明確な時代だった。「子どもの耳目」に入らない出来事や大人の事情が多かった。戦前・戦中・戦後の教育改革の全ては、大人が責任をもって携わり、子どもは提供されたものをただ享受するだけで、それが当然のことと考えられていた。歴史を振り返っても現代ほど子どもと大人の世界が混淆している時代はないのではないだろうか。マスコミの発達・普及、情報伝達手段の急速な展

開・発展・普及は、ろくに考える暇もなく、対応する手だてを工夫する余裕もなく、子どもたちを大人の世界に引きずりこんだ。現在学校で生じている様々な問題は、結局のところ究極的にはそこに起因するのではないかと考える。

以下は、まだ、「子どもの世界」が保たれていた時代に、一人の児童・生徒・学生が必然のように身の周りに存在した「教育の場」で経験した事実の、個人的な記録である。

## II 小学校（昭和十六（1941）年四月から昭和二十二（1947）年三月）

昭和十六（1941）年四月、私は東京都中野区新山国民学校に入学し、昭和二十二（1947）年三月、鹿児島県阿久根小学校を卒業した。

改称された「国民学校」の最初の入学生であり、「国民学校一年生」という唱歌もできていた。東京空襲が始まり、学童疎開が計画され実施に入っていた昭和十九（1944）年三月十五日、日立製作所亀戸工場で航空機のモーター製造に従事していた電気技師の父が急逝した。その結果、八か月の身重だった母と国民学校三年生の長女の私、一年生の弟、学齢前の次弟が残った。この急に生じた母子家庭が東京での生活を続けることは不可能となり、母方の祖父母が隠居生活を始めていた鹿児島県阿久根（当時は村だった）に急拠、疎開することになった。昭和十九（1945）年四月（あるいは五月に入っていたのかもしれない）私は、阿久根国民学校に転入した。昭和二十（1945）年八月、五年生の夏休みに敗戦、その後、どの段階かで国民学校が廃止され、「小学校」に戻っていたかと思われる。校舎は焼け落ち、まだきちんと復興していなかった阿久根小学校を昭和二十二（1947）年三月卒業した。

この時代の学校生活の記憶は、新山国民学校一年生と、子どもながら様々なカルチャーショックを体験した阿久根国民学校四年生の二年間が極端に鮮明である。敗戦後の五年生（担任八田先生）・

六年生（担任松下先生）の学校生活に関しては、教科書の墨塗りなど、部分的な記憶があるだけである。「墨塗り」は五年生時、八田先生の指示に従って「墨を濃く磨って見えないように」消した。六年生の松下先生（当時は女先生と呼ばれていた）を囲んで、校庭の焼け残った大樹の下に、登校することができた者だけが丸く円を作って座り、樹下の木陰で授業を受けた記憶もある。どんな内容だったのだろう。

私は「教育」は極めて連続的な事象であると考えている。同じ教育が提供され、同じ場でそれを受けたとしても、受け取るもの、影響されることは、各人のそれぞれの経験歴と資質によって大きく異なる。従って、誰かのどの部分かの「教育」を語るとすれば、その人の過去の生育歴、教育歴をすべて知らなければ正確な判断は出来ない。

本稿の端緒は、「戦後の民主主義教育はどのように行われていたのか」という問題意識である。戦後の民主主義教育は昭和二十二（1947）年の、六三三四制の発足に始まるであろう。従って私個人でいえば、昭和二十二（1947）年四月新制度下の「阿久根中学校」入学から始まるといえるだろう。私自身の記憶も中・高時代については鮮明である。しかし、これらの「教育」から私が何を、どのように自己形成していったか、形成していき得たのかは、それに先立つ小学校時代の生活、更にそれに先立つ幼少期の環境を記さなければ、余り意味のある記録にはならないと考える。そういう判断の下、小学校（国民学校から小学校）時代、地域として東京から鹿児島県阿久根の時代のことも別途記述したが、本稿の目的から逸脱すると考え、割愛することにする。

既に、昭和十三（1938）年、国家総動員法が公布されている中での「国民学校」発足であるから、そこでは徹底した軍国主義教育がなされ、その下で学校教育の第一歩を踏み出した一児童が、父の死という大きな家庭環境の変化を経験し、更に未知の土地鹿児島県阿久根の生活に馴染んでいった過

程なくして、その後の「中学校・高等学校」の生活は語れない。現在のように、都会の生活も田舎暮らしも大きな差はなく、情報量についても大差はない時代とは全く違う。戦時下、全国統一の気風が強まっていたとはいえ、都市と地方の生活は、文化的にも日常生活レベルでも大きく異なっていた。日常用いられている言葉も、現在のように共通語がマスコミを通して徹底普及していたわけではない。地方の「国民学校」には「標準語」の時間があって、方言は汚い悪い言葉と決めつけられていたが、人々の生活は普通に鹿児島弁（というより阿久根弁）で行われていた。同じ鹿児島県でも地方により大きく違い、相互理解は難しい状況でもあった。そういう中に突然放りこまれた九歳児が、どのようにそれを受け入れ、克服していったのかの理解なしには、私の中学校生活を理解してもらうことは、難しいと考える。

しかし、ここでは「民主主義教育」の始まりに視点を絞りこみ、中学校生活を中心に一そしてその延長ともいえる高等学校生活について述べることにする。

### III 新制阿久根中学校（昭和二十二（1947）年四月～昭和二十五（1950）年三月）

昭和二十二（1947）年。この年、日本の新学制が法制化され、実質的に動き出したのだろう。同年、日本国憲法も施行され、敗戦後の混乱・荒廃からの復旧も何とか一応の目途がつき、人々は未来に目を向けることができたのだろう。

新制阿久根中学校は、二つの小学校区（阿久根小、山下小）を統合する形で、波留部落の田圃の中にあつた「青年学校」の校舎を利用して開校した。敗戦直前、空襲で阿久根の街は全焼したが、焼け残ったこの校舎は、木造平屋建て。一年生だけの初年度、教室が足りず、机や椅子もなく、一部屋に二学級、板張りの床にじかに座って授業を受けた。黒板はあつたが文字どおり足の踏み入れ所もない状態で指名されて前に出る時は友だちの足や膝を

踏みつけるしかなかった。各自、自宅から何か机になるような板か台を持参した。私は台所の調理台の袖板をはずし、足になる二枚の板を横木に挿し込む形の机を母と共に作り、それを抱えて毎日登校した。中学校は阿久根の街並みを通り抜けた反対側にあり、子どもの足で一時間以上かかったが、私は毎日、はだしで通学した。「行って参りませう」と挨拶して土間にそのまま降り立ち、学校に着くと、渡り廊下に濡れ雑巾が並べてある。それで足の裏をふいて教室に入った。ほぼ全員がはだし通学だった。昭和十九年、東京から阿久根に来た当初は、すぐ鼻緒ずれが出来て藁草履もはけなかった都会っ子の私も、阿久根での戦中・戦後の三年間で、往復はだしでの通学も平気になっていた。世の中が少し落ちついて、物資もいくらか出回って、下駄ばき通学の生徒が増えていく中で、我が家は下駄も買えず、私はずいぶん長く、はだしで通学した。忘れ物をすると、先生方は「取りに帰れ」と容赦なく命じ、生徒も誰一人文句をいう者はいなかった。

いつ、校舎が増築され、一クラスずつの授業になったか覚えていないが、三年生では一人一人の学習机と椅子があつた。三年次には、前後左右の席の者がグループになり、机を寄せて班員が話し合う、いわゆるグループ学習のような勉強もしばしば行なわれた。「グループ学習」という名称はなかったが、同じ班の友人とは一気に仲良くなった。

物資不足は続き、流通機構も整わない中、生徒の学習環境を整えるため、大人たちは全力を振るったに相違ない。当時は何も考えなかったが、今にして大人たちの努力と子供の教育にかけた情熱と夢が理解できる。従来の「父兄会」にかわる新しい組織「PTA」、成人男子が極端にすくなくなっていた日本では、PTAを支えたのは母親たちだった。教師とPTAの役員たちが、最優先事項として、教育の場の充実を目指したに違いない。それは、ほぼ壊滅状態といえる日本を「教育によって建て直

そう」という大人たちの熱意と覚悟の象徴だったに違いない。私たちは夢の担い手だったのだ。

今、中学校・高等学校の時代を振り返ってみると、自分たちがいかに先生方に愛されて時をすごしたかよく分かる。その愛を当然のように思い、ろくに受けとめることをしてこなかったと悔いが胸をえぐる。私個人ということだけでなく、生徒たち一人一人が大人の夢だったのだろう。

以下、各教科について、記憶を辿ってみる。

**国語。**口語文法を習った松本先生は復員軍人で、軍隊では軍曹だったとか。前列から一人ずつ立たせて、形容詞や形容動詞の活用を言わされた。「かろ、かつ、く、い、い、けれ」「だろ、だつ、で、に、だ、な、なら」とうまく言えないと、拳骨で頭をゴツンと叩かれ、「次」と、後の席の者の番になる。それがいやで必死に覚え、その後特に暗記するような機会はなかったが、今でもスラスラと言える。誰も体罰などと騒ぐ人はいなかった。

もう一人の国語の先生、花木純保先生は、後に知ったが地方では知られた詩人で、後に同人誌など主催なさっていた。この方には、授業以外に様々なことを教えていただいた。詩を読むこと、書くこと。中学時代に私は手製の詩集を三冊作って、先生に見てもらった。お芝居を観ること、演じること。はじめて観た商業演劇の舞台は花木先生に連れられて鹿児島市で観た、前進座のシェイクスピア劇だった。河原崎長十郎や静江の芝居を観て感動した。私一人連れていってもらったのだから、いわゆるヒイギだが、誰も咎める人はいなかった。今でこそ、「前進座のシェイクスピア?!」と思うが、当時はそれしか知らず、舞台演劇にのめりこんだ。中学校二年の時「修善寺物語」の姉娘桂を演じた。講堂も演壇もなかったが、二教室続きにできる部屋があり、そこに各教室から教壇を運びこんで、積み重ねて舞台を作った。そこで「学芸会」や「弁論大会」が催された。「修善寺物語」では花木先生が演出で、各学年から選ばれた生徒がそれなりの役を割り当てられて演じた。衣装は持ち寄

りで何とか工夫した。私は母の着物を借りた。背景などは絵の先生が協力して下さった。生徒だけで吉野源三郎「君たちは何のために生きるか」を取り上げたこともある。この時、私は演出を担当した。

三年生の時、花木先生が西田幾太郎の『善の研究』を貸して下さったことがある。翌日、担任の若松愈三先生（数学担当）から「まだ早いからもう少し後で読みなさい」と取り上げられたことがあった。今、どちらの先生の気持ちもよく分かる。

花木先生は、優れた文化人だったと、今、思う。風貌が狸に似ていて、あだ名は「狸」だった。漢詩を習った時、いたずら者の男子が黒板に「年々歳々 狸 不同」と「人不同」をもじって書いて先生を迎えた。この事件の結末がどうなったか覚えていない。私の文化的な側面の開眼はこの先生の賜と思うが、それが可能だったのは、母の影響だろう。母は旧制の実践女学校の国文専科の出で文学少女だった。私たちきょうだいは母の影響で子どもの時から自然に読書好きになった。戦前、東京の自宅には、当時としては珍しく子ども向きの本が沢山あり、制限された疎開荷物の中に、優先的に子どもの本が入れられた。母は歌も好きで東京の家には子ども向きの音楽劇風の「虫の音楽界」「雨だれぽっつりさん」などの、歌とせりふで構成されたレコードもあった。それは阿久根に疎開する時、東京に残してきたが、母が記憶を辿ってノートに書きとめ、くり返しせりふ入りで歌ってくれた。私も久しく歌ってはいないが「雨だれぽっつりさん、雨だれぽっつりさん、後からも、後からも、ぽっつり、ぽっつり、ぽっつりさ〜ん……」と多分今でも歌える。こういう基盤があって、花木先生のご指導をすんなり受け入れることができたのだろうし、先生も目をかけて下さったのだと思う。

**英語。**これは今思うと、ひどい先生に習ったと思う。英語は敵性言語として早く学校教育から追放され、日常生活でも使うことは拒否されていた。

戦後田舎町の阿久根で英語を教えられる人材はなかったのだろう。戦前、旧制の中学校と女学校は、教育のレベルが全然違っていたという。中学校の英語は旧制高等学校や大学への進学を考えて本格的なものだったそうだが、女学校では全く重視されていなかったらしい。従って、旧制中学校に行っていればそれなりに英語ができたのだろう。

中学校一年生の時、英語の手ほどきを受けた先生は、今思うと、旧制中学校の一年か二年の時、学徒動員で学業から離れ、そのまま敗戦を迎えた人だった。「ジス イズ ザ ペン」「アイ アム アボーイ」とすべての音節が母音で終わる日本語の音韻構造のまま、教科書に片仮名で振り仮名をつけて読んだ。現在に至るまできちんと修正できていない。

二年生の先生はもう少しまして、旧制の大学の途中で学徒出陣して復員なさった方だった。この方は一年で教師をやめ、すぐ大学に復帰なさった。

三年生の時の先生は、一番まともな英語の先生で、鬼塚巽先生。髪が額のところでくると丸まっていて、あだ名は「天然パーマ」。この先生の英語の授業よりも軟式テニスを教えてもらったことの印象が深い。三年生の頃には、中庭に教室の壁を利用した壁打ちの練習場所が出来ていて、私はがんばって一人でよく練習した。

**数学**、若松愈三先生。

**理科**、高峰先生。

若松先生は三年の担任で、夏休み、同級生たちと、先生のお宅に遊びに行ったりしたが、授業について特に印象に残ることはない。私個人としての理数系の科目に大して興味がなかったのだろう。生徒が授業を批判したり、感想を述べたりすることは全く、求められていなかった。生徒は教えられる「勉強」をひたすらこなす姿勢だった。どういう形式の試験があったか、どういう評価がなされていたか余り記憶はない。席次が生徒間で問題になることは、ほぼ全くなかった。私は勉強好きで、

努力もした。成績もよかったと思う。「勉強の出来る人」ということになっていたし、自分自身もそれに甘んじていた。友人たちからそれなりに尊敬もされていたと思うが、「出来ない人」が責められたり、馬鹿にされたり、「したくない人」が強要されることはなかった。そういう意味で学校は自由だった。「勉強」はしたい人がすることだったのだ。

**書道**。(科目名は「習字」だったかもしれない。)

柳田先生。正科としてどのような授業があったのか大した記憶はない。だが、放課後や夏休みなどに今でいう課外(クラブ)活動のような、自由参加の書道の勉強会があった。これに参加して楽しかったことを覚えている。こういう活動では、先生方は、みな自分の私物を提供して、習う気がある生徒に、出来る限り教えて下さっていたのだと思う。「時間外労働」だの「勤務時間」だのを気にする様子は全くなかったし、生徒も(多分保護者も)、気にしていなかった。それでも、常識的に、生徒は日暮前に帰宅し、自宅の夕食のリズムの中で日常を営むことは守られていた。規則などはなく、社会全体に、守るべき規範が存在し、人々は常識としてそれに従って生活していた。

**美術**(図画)。関本藤雄先生。肌の色がとりわけドス黒い感じで、あだ名は「ドグ」。時間割は「美術」ではなく「図画」だったように思う。授業だったのか、課外の活動だったのか、休日や夏休みなどに、スケッチに出かけた。今も自宅や近くの海辺の風景の水彩画が数枚残っている。松林の古木の松の太い根っこだけを画面一ぱいに描いた絵が、何かの展覧会で入賞し、県内の各学校を回覧されたとかで、手許に返って来なかった。この絵は気に入っていたので、覚えている。

関本先生は自宅の方向が同じだったので学校帰りに一緒になることもあった。そういうある日、夕焼けの中を、高台に建っている我家を見上げながら、関本先生が「こういう全体の雰囲気を描けるようにならないといけない」と言われた。私はすぐ理解した。つまり私の絵は、いつも、画材その

ものの本来の色彩にこだわり、全体が茜色に染まっている姿を描けていないのだ、と。先生が言われることはもっともであり、一步進むためにはそれが大切だと分かったのに、私はその方向で努力・精進しようとは思わず、私の画業はそこで終わった。性来の天邪鬼のせいかもしれないが、それほど絵が好きでなかったということだろう。才能の欠如を自覚した最初の場面で、印象深い。関本先生も私物を提供して、学びたい生徒、熱心に習おうとする生徒に教えていらしたのだと思う。

**音楽**、松迫俊男先生。この先生のご指導の下で「故郷」「隅田川」「故郷を離れる歌」など、沢山の歌曲を四部合唱した。今も全パート歌える。全員で、順々に一パートずつ、全パートの練習をして合唱した。学校にたった一台、足踏みオルガンがあるだけで、先生は、私物のアコーディオンを持参して、伴奏して下さいました。

どういういきさつからか覚えていないが、私は学校で唯一人、その足踏みオルガンでバイエルを最後まで習った。特別扱いに文句を言う人は、表立って誰もいなかった。音楽の才能が全くないことは、先生が一番よく分かっておられただろうと、今は思うが、その時はただひたすらがんばって練習したし、面白かった。

**家庭科**。福山シズ先生。裁縫・料理などとおりのことは学習した。二年生で浴衣を縫ったと思う。木綿の布で型紙どおりに「パンティ その1」「パンティ その2」を作ったが、当時の感覚では被う部分が少なすぎて、実用にはならなかった。当時は「ズロース」と称するブカブカの下着をつけていたのだ。

中学一年生のある朝、校庭に並んでの朝礼の途中で友人の一人が初潮を迎えた。今のように衛生知識が普及・周知されていたわけではなく、友人の足を流れる血の色に仰天、騒然となったが、女教師数人で急いで校舎に連れこんだ。その後しばらくして、女生徒だけ一教室に集められ、福山先生が生理の話と対処法を教えて下さった。ふんど

しのようなT字帯（今は腹部手術の時に使う。三年前、大腸癌の手術の際、購入を求められて懐かしかった）を各自自作して、不用なボロ布をあて布にして、対処するしかなかった。その教室の校庭側の窓際や前の廊下を、男子生徒たちが何事かとウロウロしていたのを覚えている。

**技術科**。（という名前だったかどうかわからない）。男子だけの科目で女子だけの家庭科の時間と組み合わせになっていた。藁草履を編む授業などは、家庭科と合同で女子も携わったのを覚えている。私は全く下手で実用になるものは作れなかったが、農家の子どもたちは、実に上手だった。

**体育**。遠矢良行先生。この方に、九人制のバレーを教えていただいた。体育の授業も課外のクラブ活動も、実際は区別されていたのだろうが、生徒の認識では、それほど分離していなかった。九人制バレーボールでは、私はただ一つ、当時は余り知られていなかった「流しトス」、つまり、ボールの勢い（回転）を消して、ネットと平行に端から端にトスをあげ、アタックさせるという技を持っていて、校内の試合や近在の学校との練習試合に勝利した。他校ではこの技が使われることは見られず、私はこの技一つでいわば、レギュラーの位置を守った。当時は全国大会は勿論、県の大会もなく、対外試合といえば近隣の中学校と練習試合をする程度だった。

新しく導入されたハンドボールでは、隣の脇本中学校との試合があり、これは主として女子のゲーム（多分男子は野球だったと思う）だったので、脇本中の目立つ女生徒の名前を気のきいた男子が聞いてきて騒いでいたのを覚えている。この時、戦った人たちの一部は、後に高等学校で同級生になった。

足も遅いし、運動神経も劣っていた私でも軟式テニスにハンドボール、九人制バレーボールと、学ぶことができ、挑戦する機会は与えられた。私はすべてのチャンスに飛びついて懸命に練習に励んだ。当時は結果を云々せずに、熱意のある生徒

にチャンスが与えられていたと思う。

当時は校内弁論大会も盛んだった。自由に物が言えない時代を経験した大人たちが、自由な弁論、自分の意見を自由に述べることの大切さと喜びを痛感していたからだろう。各クラスの代表(選手)による校内弁論大会が度々行われた。郡や県の大会も私の三年生の頃にはあったように思う。一度鹿児島市で行われた大会に出た覚えがある。校内弁論大会には私は毎回出場して、ほぼ優勝していた。演題には、宮沢賢治の「世界が全体幸福にならなければ個人の幸福はあり得ない」という言葉やアンデルセンの「薔薇ならば花開かん」という言葉など取り上げて論じた。弁論は、原稿を自分で書かなければならないので、多分出場希望者は多くはなかったのだろう。私は文章を書くことは好きで一向に苦にならなかった。

中学校卒業の際、三年四組の「卒業文集」を作った。「太陽」と名付け、みんなで原稿を書き、先生方にも頂いて絵の得意な生徒が似顔絵などを引き、ガリ版でザラ紙(当時 ワラバン と呼んでいた)に印刷した。生徒たちだけで企画し、作成したが連日帰宅が遅くなり、仕上げる頃には夜も更けたりして心配した PTA の役員たちが迎えにきたりした。

おそらく、教師たちも手探りだったのだろう。ほぼ何でも好きにやらせてもらった。国は焦土となり社会全体は混乱していたといえ人間関係の基盤はしっかりしていたと思う。上下関係や長幼の序は保たれており、何より学校と教師の権威は存在していた。生徒たちは何はともあれ大人たち、特に教師の言うことは聞いた。それがあったから、先生方も自由に思うように指導することができたのだろう。

私は中学校時代、先生方からくり返し言われたことの一つは「何か一つに集中すればもっと成果を上げられるはずだ」ということだった。しかし、多分、私自身がそうではないということに気付いていたと思う。私には何か一つ「これしかない」というものはなかった。すべてに興味を持ち、すべ

てに精一ぱいの努力を払い、すべてに一応の(ある程度の)成果を得る。それが私なのだ。

そしてもう一つ。先生方は「もっと自分を解放すればいいのに」と思っておられるようで、時折、そういう意味のことを言われた。私は何にとらわれていたのだろうか、自分自身では分からなかった。中学三年の時、担任の若松先生が母に「康子さんは自制心が強すぎる」言われ、母もはっと気付いたと、後年話してくれた。私は小学校三年時に父を亡くして以来「身重の母を支えなければならぬ」「出来るか、出来ないかではない。するのだ」という考え方で生きてきた。その考えに縛られていたのかもしれない。先生方は、一人一人の生徒をよく見、よく知り、その生徒に必要なことを考え、助言する。しかし押しつけないという姿勢が徹底していたのだと思う。それは、大人たちが、子どもの未来に夢を託したことの表れであり、大人たちの深い悔いの表現でもあったのだろう。

中学校の修学旅行は北九州市から別府・阿蘇登山の旅程で、三日間のお米を各自持参し、毎日それを宿に渡す旅だった。私の班には、どの班にも入れてもらえないのけ者、嫌われ者ばかりが集められ、先生に「頼むよ」と言われた。私は別に何とも思わず、修学旅行は楽しかった。班員たちの気持ちはわからないが、別に抵抗する者もなく、彼女たちは、一人も普通科の阿久根高等学校には進学しなかったで、彼女たちとの縁はそこで切れた。

全て物事に好むと好まざるとを選ばず挑戦し、全力で努力し、最善を尽くしてみろという生き方をその後も変えることは出来なかった。物事に対する向かい合い方はこの中学校三年間で、基盤が出来たように思う。先生方は、しっかりした大人で、今思い起こしても、簡単に自分を見せることはなかったが、生徒たちに万幅の愛情を持って、それぞれの成長を促してくださったと思う。社会の規律がそれなりに保たれている中、新しい教育のあるべき姿を求めて、各先生が、精一ぱい、自分の出

来ることを為しておられたと感じる。今思えば、それは誰しもが手痛い思いを自分の中に塗り込め、「國破れて山河のみがある」日本を、何とか取り戻そうとする、大人たちの共通した思いであっただろう。一つ一つの行事、毎日毎日の授業が、先生方にとって生命がけの勝負どころだったのだ、と今にして思う。模索を続け、手探りでよいやり方を見付けようとあがき、生徒の前では、毅然として、「教師」の姿を見せておられた新制中学校の先生方、様々な経歴の方々が、たまたまそこに寄り合っておられたと思われる教師集団、戦前戦中を生きた大人は一人一人それぞれの挫折を味わい、人生の行路を戦争で妨げられ、様々な思いで教壇に立っておられたのだろう。ただ一つ、夢を生徒たちに託すという一点、そこだけで、一致協力しておられたからこそ、生徒たちがあのように信頼し、言うことを聞き、みんなそれぞれに、何者かになっていったのだろうと思う。新制中学校の当初の三年間（昭和二十二年から二十五年）、そこは人々の善意の集結の場であり、模索の過程であり、試行錯誤の連続であったのだろうと、今、振り返る。

最後に、いわゆる進路指導なるものがあつたかどうか述べる。一人一人の生徒は、自分の志よりも家庭の事情に多く支配されていた。江戸期の「士農工商」は勿論、明治以降の「皇族・貴族・平民・新平民」という身分制度はなくなっていたが、阿久根では、「よかし」（いい身分の人・上流階級の人）という語が長く生き続けていた。旧士族階級の人たちに、ほんのわずか、大金持ちの商人の家庭が入っていた「よかし」の子弟は、当然のように上の学校に進む。町家がそれに続き、余裕のある家庭の子どもは実業学校系に進学する。第一次産業の担い手の農家や漁師の家の子どもは、義務教育が終われば当然のように家業に従事するか、出稼ぎに行く。それが常識だった。大半の生徒はそれを自然に受け入れていた。中学校の同級生の多くは、中卒で学業を終え、関東や関西に就職した。

「分相応」という語（概念）が社会全体に行きわたり、人々の身に染みついていたのだ。勉強が好きかどうか、出来るかどうかは問題外だった。勿論、勉強の出来る子（阿久根では「タマシキキ」と呼んでいた）は何とかして上の学校に行かせたいという風潮は、明治以来の立身出世主義の中で存在していたし、ケースバイケースで、工夫もされてはいた。

女生徒の大半は関西の紡績工場に女工として就職した。その一人が数年後、大学一年生になって夏休みに帰省していた私を訪ねて来てくれた。「私は働いているからー」と、セルロイドの裁縫箱、緑色に花模様のついた小箱をお土産にくれた。プラスチックのない時代、セルロイドは高価なものだった。その時の衝撃を私は今も忘れない。その友人の名前さえ忘れてしまったが、この時の彼女の表情と、私の胸の痛みは、今も記憶に新しい。

それは、今、考えて言葉にすれば、「彼女は中卒で働き、おそらくは親に仕送りしながら、僅かの小遣いで私にお土産を買ってきてくれた。私は、自分の好きな勉強を続け、楽しい充実した月日を過ごし、新しい世界を見ている。この不公平をどう受けとめたらいいのだろう」というようなことだろうか。この緑色の裁縫箱（針挿しや糸などの裁縫道具を入れる小箱）は今も私の手許にあってあの日の衝撃を思い出させる。私は、先生方の愛情だけでなく、友人たちの、このそれぞれの分をわきまえ、それぞれの場で努力し、分相応の暮らしを紡ぐ、という素朴な考え方や生き方にも支えられ、恩恵を受けてきたのだ。

#### IV 新制阿久根高等学校（昭和二十五（1950）年四月～昭和二十八（1953）年三月）

新制の阿久根高等学校は旧制女学校を基に開校された。男女共学の形で入学したのは、私の学年が最初だが、新制中学校のように上級生のいない一年生だけという形ではなく、二年、三年には女学校で卒業せずに新制高等学校に編入する形で残

留した少数の先輩がいた。大半の生徒は四年制の女学校だけで卒業していったという話だったが、四年に満たない生徒は中退という形になったのだろうか。後にはほんの数名の、様々な年齢・経歴の男子生徒が編入されてきたが、大半は女生徒で旧制女学校の気配が色濃く残っていた。いわゆる<sup>エス</sup>Sさん（シスターの<sup>ドット</sup>Sで、女生徒間で上級生が特定の下級生を可愛がって特別扱いをする風習で、吉屋信子などの少女小説の主なテーマになっていた。）の噂もささやかれていた。

「阿久根高等学校」への進学は、いわゆる「よかし」（旧士族や一部の富裕な町人）の子弟だけでなく、戦前なら絶対に義務教育以上に進むことのない農家や漁師の家の子も入学していた。かつてそれらの子どもたちは、各家庭の大切な労働力であり、家業を担うか出稼ぎに出て現金収入を家族にもたらした。そういう子どもたちのうち、際立って勉強の出来る子は郷土出身でそれなりの成功をおさめている人のもとに、男子は書生、女子は行儀見習い（実質は女中）として引き取られ、仕事をしながら学校に出してもらっていた。大てい学費の余りかからない師範学校に入って教師になった。阿久根の祖父は裁判官で郷土一の出世頭といわれ、母の育つ間、何人もの書生や行儀見習いが同居していたという。その中の一人が奈良県で教員生活を終え、定年後郷里に帰って阿久根市の教育長を永年勤めておられた。深く恩義を感じてか晩年の祖父の力になり続けて下さっていたことを思い起こす。これは、貧困家庭の子女の教育について一つの社会的な仕組みになっていたと思われる。太平洋戦争前の話である。

新制高等学校は小学区制で実施された。小学区制とは、普通科の高校への進学について小さく区切られた一定の区域内の生徒は、その区域内の特定の高校への進学に限定する制度である。阿久根高等学校は校区内に中央の阿久根中学校の他、国鉄（現在のJR）の上り方面の脇本中学校、下り方面の大川中学校の三中学校が所属していた。この

制度は各高等学校間の格差をなくすためのものだったかと考えられるが、十年も持続しなかった。二学年下の弟と、更に二学年下の次弟の時はこの制度下で、姉弟三人同じ高等学校でほぼ同じ教師に学んだが、私より十歳年下の妹の時は廃止されていた。その結果妹は、自宅のすぐ隣、自宅の建つ丸尾が丘の一段上の頂上に阿久根高等学校があり、学校の鐘の音が聞こえる距離だったにもかかわらず、上り方面の隣接高等学校、「出水<sup>イズミ</sup>高等学校」に汽車通学した。出水高等学校と下り方面の川内<sup>センダイ</sup>高等学校は、前身が旧制の中学校で教員構成も違い学力レベルが高く、阿久根中学校で成績のよい生徒は全員出水高校か川内高校に進学した。妹は「仲良しの友達がみんな出水高校に行くからー」と言っていたが、大人になってから「姉ちゃんや兄ちゃんと同じ学校には絶対行かないと考えていた」と打ちあけた。教員の転勤もあまりない時代で小中学校時代、姉や兄に比べられ、うんざりしていたのだろう。汽車通学はとても楽しかったようだ。

高等学校の入学試験の詳細は殆ど覚えていないが、大川中学校出身の男子生徒が一番で、入学生代表で答辞を読んだ。私は二番目だったそうで「阿久根中学から代表がでてなくて残念だ」と後に阿久根中学校の先生から聞かされ、「そんなことなら試験をもう少しがんばるのだった」と思った記憶がある。中学校間でも成績競争が芽生えていたのだろう。阿久根高等学校の前身「阿久根女学校」がどういういきさつで設立されたかは知らないが、旧士族階級の子どもの進学者は少数で、試験が零点でも入れるというところから「零点女学校」と呼ばれていた。中学校では、農業高校など実業高等学校への進学者の方がむしろ多いくらいで、一番多いのは、就職する子どもたちだったからか、入学試験にむけた試験勉強などというものは一切なかった。

高等学校では授業は完全選拓制で行われた。若干の必修科目はあったが、ごく少数で、各自、自分の希望で履修科目を選択し、時間割を作成し、教

科ごとに教室を移動した。学級は男女別だったが、その形で授業を受けることはなく、朝礼や終礼、掃除などのための組織だった。一年次の「一般社会」「日本国憲法」などは必修だったが、「社会」の教室に移動して、共学の形でクラス編成がなされていたと思う。昨今のように、文系、理系などのコースによって、学校が選択科目を用意するのではなく、完全に個人の選択制だった。人数オーバーによる抽選などもなく、多ければ多い、少なければ少ない形で授業が行われた。

以下、各科目の授業について述べる。

**理科。**一年生「生物」（佐多先生）、二年生「化学」（水流先生）、三年生「物理」（村山先生）を選択。「生物」はメンデルの遺伝の法則を興味深く学び、「化学」の実験も楽しかったが、三年の「物理」を選択する女生徒はととも少なかった。私は、「電波」のところでつまづいた。「音波」までは何とか理解できたが、「電波」で何がなんだかわからなくなった。「物理」の世界はまっくらだった。

**数学**（米満先生、表迫先生 あだ名は「ザコ氏」。）「一般数学」という多分比較的やさしい科目があって女生徒は大半それを選択していたが、私は、一年「解析Ⅰ」、二年「幾何」、三年「解析Ⅱ」を選択した。男子の中に数名の女生徒という形の授業だった。「解析Ⅰ」は、いわゆる「代数」で、方程式の計算など。二年の「幾何」は、いくらか女生徒も多くなり、平面幾何（いわゆるユークリッド幾何学）で私は補助線を引くのが得意だった。三年の「解析Ⅱ」でほとんど女生徒はいなくなり、私は「順列組合わせ」の部分で「物理」と同じく、全く理解できなくなった。解き明かそうとする世界がさっぱり見えてこない。何一つ理解できない。私は理解することを諦め、試験には丸暗記で臨んだ。実力テストとか校外のテストなどはない時代で、学期末毎のいわゆる定期試験は学習した内容が若干形式や数値などを変えて出題される。私は教科書とノート丸暗記し、試験の際には「教科書のあのページ、開いたところに図があって、ノート

のこのページと同じ問題だ」と思い浮かべて答案を書いた。成績はいつも良かったが、何一つ分かっていないことは自分自身自覚していた。高校の三年のこの段階で理系分野を諦めた。

**音楽**（萩原先生）。中学校での特別レッスンが高等学校にも引き継がれ、（多分、中学校の松迫先生が頼んで下さったのだと思う）私は、学校に一台あったグランドピアノでソナチネまで進んだ。一年生の時の学芸会でトルコマーチを弾くことになった。指が固くて短く、オクターブ上げるのがやつの私は、オクターブ連続して弾いているうちに一音ずれてくる。学芸会は乗り越えたが、才能のなさは自覚できた。

その事にはっきり気づき、音楽を諦めたのは、才能溢れる友人の存在だった。私は中学から特別にピアノ（中学では足踏みオルガンしかなかったが）を習っていたのに、合唱部での伴奏は楽譜を見ながらでも完全には出来なかった。それなのに部員の一人、松本君は聞いているだけで、ちゃんと弾けた。本物の才能とはこういうものかと悟った。松本君は戦前なら決して高校に進学することはなかったであろう漁師の家の子だった。戦前なら音楽の才能を開花させてそれで生きることは決してなかっただろう。これは、戦後の教育の成果の一つの事例だと考えて、喜ばしいと思う。松本君は、後に、博多のキャバレーでピアノ弾きをしている時に見出されて、RKB 毎日放送の楽団でピアノを弾くようになり、更に指揮者になった。RKB 毎日の人気番組「親子揃って歌合戦」の伴奏の楽団を指揮した。もうテレビの時代になっていて、私は指揮ぶりをテレビで観た。

音楽は高等学校で断念したが、音楽の才能に恵まれなかった事は、私の生涯で残念無念なことの一つである。才能はなくても好きで、それなりに助けられもした。例えば、ベートーベンの曲は、ほんの一部を聞いても何故かそれと分かり励まされた。元気を出したい時は、ベートーベンの曲を聴くというのが、若い頃の私の気力回復の方法の一

つだった。今は圧倒されて、元気が出るどころか益々落ちこむようになっていく。楽器演奏の才能も歌う才能もないが、楽しむことが出来たのは、中学生の時、訳も分からず足踏みオルガンでバイエルを弾いていた、あの頃に由来するのかもしれない。

**美術**（宮内先生）。油絵を画かれる先生だったが、授業は選択しなかった。授業以外ではいろいろお世話になった。絵画については、中学校で諦めていたのだ。

私の学校生活は出来る事を見付けるといふよりは、自分に出来ない事を発見して諦めてゆく過程だったように思う。

**社会科**（園田先生）。一年次の「日本国憲法」には夢中になった。やや異色の先生で、演劇部の顧問でもあった。「日本国憲法」の授業は確か『私たちの憲法』という手の平サイズのザラ紙の冊子をテキストに行われた。今も私の書架のどこかにある筈だ。何があんなに面白かったのだろう。法律で日本国中の全ての人の生活が規制される点に興味があったのかもしれない。一時は法律専攻を夢みたほどだった。社会科は、二年「日本史」（中尾亨先生）。三年世界史（同じ先生）を選択。「人文地理」を採らなかったせいで、私は今も日本や世界の地理に極めて疎い。「人文地理」を体系的に学ぶ機会は二度と訪れなかった。

**国語**の二人の先生（まず遠矢良郎先生）。この方は中学校で九人制バレーボールを指導して下さった遠矢良行先生のお兄さんだった。（中尾良忠先生）。この方のお嬢さん、玲子さんが同級生で娘にあてるときは、「玲<sup>レイ</sup>、読みなさい」と呼び捨てだったことが印象的だった。ちなみに私は長崎大学教育学部に勤務時代、教養部に非常勤講師として出講した際、医学部一年生に在学中の三男を教えたが、出席を取る時、知らん顔して「山口君」と呼んだ。

遠矢先生は、生活指導（当時どういう名称だったか覚えていない。）の担当でもあり、あだ名は「番犬」。私が国語を専攻するきっかけになった授業が

ある。森鷗外の「高瀬舟」。文章を切り刻まず全文が教科書に載っていた。島流しになって高瀬舟で送られる主人公と、それを監督し、送り届ける役目の役人という立場の違う二人の人物の心理を汲み取って「知足」という問題について考え、作者鷗外の意図を理解するという授業だった。その考察の過程がとても興味深く、結局、国語教師として一生を生きるきっかけになった。

遠矢先生は、後に、「君たちに教えた頃は「助教」でまだ若く知識が足らずすまなかった」とおっしゃった事があり、私は仰天した。そんな事は夢にも思っていなかった。確かにお子さんは小さかったが、生徒指導の面でも厳しく、男子生徒は恐れていたし、そんな、お若い先生とは思っていなかった。少壮気鋭と見えた先生ご自身が勉強中の身でいらしたのだ。当時は教員不足で、長崎大学教育学部にも私の赴任前だが二年課程があったようだし、「代用教員」「助教」などの不安定な立場で教壇に立ち、現場の仕事をこなしながら、様々な検定などを受け、資格を取ってゆかれた方が、沢山いらしたのだろう。遠矢先生は私の結婚式にもはるばる阿久根からご列席下さり、ご自作の漢詩を自筆で記して贈って下さった。

国語科の中の「漢文」は「調理実習」と同時開講で「漢文」を選択したのは、男子生徒の中に女子は私一人だった。男子生徒はそれが気にいらなかったらしく、私を受けさせないような様々な工夫を凝らした。今なら「いじめ」と問題になるところだ。入口の扉を押さえて入れなくしたり、扉の上部にラーフル（黒板消し）を挿んで、開けたらチョークまみれになる仕掛けをしたりしていた。私は何度めからか、担当の表迫刀男先生の後に付いて入る方法を見付け、教室では最前列に一人座って授業を受けた。先生も気付いておられただろうが、特段に問題にされることはなかった。

「漢文」は一時間だが、「調理実習」は三時間通しである。私は「漢文」の授業が終わると調理室に駆けつけて、半分出来上がっている調理に途中か

ら加わり、最後の試食は、みんなと一緒に味わった。そういう不規則な参加を許して下さった山本先生がどういう手配をなさったのか、単位はどうなっていたのか、ほとんど気にしていなかった。

「学びたい者に学びたいだけ学ばせる」という基本姿勢があったのだろう。

**英語**（緑忠次先生）。一年の教科書にビーバーの生態を説明する文章があり、「ビーバーがね」「ビーバーがね」と繰り返し説明なさって、あだ名が「ビーバー」になった。ゆっくり丁寧に説明なさり、毎学年教科書は半分くらいしか進まなかった。次の学年には新しい教科書を最初から始めて又、途中まで。それを三年続けたが、誰も文句はいわなかった。むしろ試験の範囲が少なくて歓迎ムードだった。

私は、九大受験の際、英語の長文の問題を見て動悸がおさまらず、なかなか手がつけられずに焦ったことを思い出す。そんな長文の問題を初めて見たのだ。後に「九大の英語の長文問題」は、受験生たちの常識だったことを知る。「蛍雪時代」という受験雑誌の名前も知らない田舎者だったのだ。同級生には、「蛍雪時代」の模範解答に毎回名前が出ていたという猛者もいた。彼女は難関に挑戦したいという気持ちで工学部を受験し、工学部で最初の女子学生となっていた。工学部の全学科に唯一の女子学生だった。

さすがに英語はダメだろうと自覚していて、私は第一外語をフランス語、第二外語を英語とした。フランス語ならスタートラインが皆同じだろうと考えたのだ。それは確かにそうだったが、フランス語と英語は極めて近い言語で、英語が不得意な者には痛手だった。福岡市内の進学校出身の同級生たちは一ページに三語ぐらいしか単語を調べる必要がなく、教科書の欄外に書き込んでいたが、私は一行に三語ぐらい辞書を引かねばならず、大判の大学ノートを単語帳に使っていた。「大学生活とは単語引きと見付けたり」という心境だった。高校在学中、教科書が終わらなくても何の疑問も

抱かず、楽しく満足して、習ったところだけ熱心に勉強して済ませていたことの結果だと、改めて、高校生活を振り返ったが、悔いる気持ちやまして憤りを感じることはなく、むしろ、高校時代が楽しく呑気だったことを嬉しく思った。

**体育**（黒川先生）。ダンス専門の先生で、授業もダンスが多く、苦手の私は閉口したが、運動会などでは、私は大体、壇上で笛を吹く係だったから、演技の苦労は余りない。よほど下手だったのだろう。「ドナウ川のさざ波」などを踊った（というより笛を吹いて隊列を整えたりした）記憶がある。

高校では、授業とは別に、「クラブ活動」の形がはっきりしていた。私は中学時代と変わらず、沢山のクラブをかけ持ちして忙しかった。体育系では軟式テニス部、文化系では、文芸部・音楽部（コーラス部）、演劇部、高校でも弁論活動が盛んで弁論部、静かな中でお湯の沸く音が好きで茶道部など。多忙を極めたが、特に誰かに文句を言われたことはなく、入部制限があったりすることもなかった。

特に演劇部には力を注いだ。顧問の園田先生のオリジナルシナリオでお芝居をしたこともある。高校時代は主としてオモテ（キャスト）だった。園田先生は後に京都に出て、日活が大映だかに入り、月形竜之介という著名な時代劇俳優のお嬢さんと結婚されたという。数年後、自作のシナリオを何篇か送って下さったことがある。高等学校は、阿久根の最高学府で、学芸会（文化祭とは呼んでいなかった）には町中の人が集まった。一年次には、旧制女学校時代の名残で「<sup>セキヅキ</sup>席書」という演目があった。舞台上で大きな紙に書を書き、その場で観衆に披露するのだ。間違えることの出来ない、待たなしの芸で独唱のような緊張感があった。旧制女学校には講堂も、演壇もあって弁論大会などもこの講堂で催された。私は三年間弁論大会にも出場した。校内でクラス対抗だったと思う。演劇では、二年次に街の映画館を借り切って上演したことがあった。本当に街中の人を観にきてくれ

た。阿久根では舞台演劇に触れる機会などが全くなかったからだ。私は女流作家役で出演し、「友あり、遠方より来たる。又、楽しからずや」というせりふがあったことを思いだす。一年次のお芝居でどうしても子役が必要になり、男の子役だったが、十歳年下の学齡前の妹を動員したこともあった。

あの頃は、どうしてあんなに時間があったのだろう。テレビなど時間を取られる娯楽もなく、スマホで情報をチェックする必要もなかった。ただ、思うままに、たっぷりの時間を学校生活に投入し、したい事をやらせてもらえる学校の環境があったのだ。

軟式テニス部では、対外試合もそれなりに行われた。私は大した戦績はあげなかったし、特に有力選手ではなかったが、続けることはできた。部員の一人のお兄さんが熊本大学医学部の学生だったが、国体にも出るような実力者で、コーチに来てくれたこともあり、ボールの回転など、理論的に教えてくれたりした。顧問の先生は覚えていない。生徒だけで自由に活動させてくれていたのだろう。部員同士に様々な葛藤は生じたが、解決に大人たち（先生や親たち）が出てくることはなかった。未熟ながら、ある意味で民主的な自主的な活動が認められていたように思う。

次に、進学適性検査について述べる。母子家庭の長女で、夏休みのアルバイトの縁で就職もほぼ内定（という言葉もなく、ただの口約束だが、人々はそれを信じ、誰もが、約束は守られるものと思っていた）していた私が、大学に進学したのには、「進学適性検査」の制度の存在が大きい。略称の「シンテキ進適」は後の「共通一次テスト」「センターテスト」現行の「大学共通テスト」の第一歩であり、私の三年次に始めて実施された。おそらく、各高校に、この初めての試みの普及のために最低限の受験者数の割り当てのようなものがあったに違いない。阿久根高校から十数名の生徒が選ばれて隣の出水高校まで、汽車で受けに行った。内容は、学力テストというよりメンタルテスト風だったのを覚えて

いる。そのテストの結果がたまたま、鹿児島県で新聞沙汰になるくらい良かった。先生方から「進学しないのは惜しい」と言われるし、自分でも、だんだんその気になった。何せ「進適」である。鹿児島県で一番「進学」に「適性」があるのに進学しないのは惜しいという気持ちになった。十七歳はまだ子どもである。とにかく勉強は好きで、物を読んだり書いたりするのは全く苦にならないたちだった。「進学適性検査」がなかったら、私は大学に進学することなく、今の私はいないだろう。「南国殖産」という交通会社で秘書室勤務を数年経験した後、多分迷いもなく然るべき相手と結婚する運びになったことだろう。どちらが幸せだったかはわからない。しかし、国語教員として五十二年間も教壇に立ち続けたことに微塵も悔いはない。

実際に、私が大学受験・進学にこぎつけるまでには、様々な紆余曲折があり、幾多の反対・抵抗を乗り越えなければならず、それは一つの歴史的事実で、女性史の面から重要な事だと思うが、当面のテーマとかかわらないので割愛する。「進適」とは、スタート当初「進学に適性のある生徒を見出す」という所期の目的をきちんと果たしたのだと思う。進学に至る葛藤は、大学生活の始まりとして、「大学篇」に譲るが、大学受験の費用を捻出したアルバイトは、高校時代の出来事なので一言書いておこう。

高校の修学旅行は、三年次の秋に、京都・奈良を巡る旅だった。私はその費用のため、三年次の夏休みにアルバイトをしようと考えた。当時、阿久根で、女子生徒のアルバイトは夏期だけ営業するキャンデー屋が中心でほとんどそれしか無かった。今思えば非衛生的な機械でバケツで色の付いた水にサッカリンやズルチンなどの人工甘味料を加えて原液を作る。機械の一区切りずつに割り箸を挿しこんでそこに原液を注ぎ入れ、それを凍らせてアイス・キャンデーを作る。不潔極まりない設備だったが、誰も気にしていなかった。

私はもう少し気のきいたアルバイトはないかと考え、阿久根の沖合に浮かぶ阿久根大島に夏の間だけ通っている客船にガイドをつけたらどうかと考えた。多分母と相談したことと思う。阿久根は海辺の半農半漁の地だが、渚からすぐ深くなり、岩場がおおく、イワシ漁の大きな漁港や、近辺の島々・天草の牛深やコシキ島に通う船の発着所はあったが、海水浴に適した砂浜はなかった。そのため阿久根に向き合って遠浅の浜辺、白砂青松といえる、それなりの広さの浜辺がひらけている阿久根大島に人々は泳ぎに行っていた。沖合四キロ、一里程度なので、泳ぎの達者な者は泳いで行ったりしたが、一般には無理で、夏の間だけ海水浴客を運ぶ客船が運行されていた。大島は周囲一キロほどの無人島で、野生の鹿が住みつき、夏の間だけは観光客（という言葉もなかった）が周辺の町からも訪れていた。船はただお客を運ぶだけだったので、これにガイドをつけたらいいのではないかと考えた次第である。

私は役場に「あの船にガイドをつけたらどうですか。つけるなら私をやとって下さい。」と言いにいった。田舎の役場だ。「案内の原稿を自分で書くなら、つけてもいい」という返事だった。私は郷土誌の本を調べたり、阿久根にまつわる故事を祖父・田中右摘に聞いたりして原稿を書き、船に乗り込んで進行につれて見えてくる周辺の景色に合わせて文章を修正したりして、案内文を仕上げた。何せ祖父は、奈良の地方裁判所の所長時代に、一度絶滅した大島の鹿を復活させたいと、奈良のご神鹿を一つがいもらい受けて阿久根大島に放ち復活を実現したという郷土の名士で、様々な故事来歴にも詳しかった。祖父の話では、この時は村長さんが奈良まで鹿の受け取りに来られたということだった。「皆様、左手をごらん下さい。今見えて来ました岬が……」というような原稿を書き上げ、多分、役場の許可が出たのだろう。三年の夏、阿久根大島に通う遊覧船のガイドとして過ごした。この経験はとても面白かった。

船は片道十分、往路は案内をして復路はレコードをかける。LP版のない時代、三分のレコードをかえる間に何かするという習慣もついた。雨の日などのお客のない時、だんだん船に慣れてからは、他の仕事も手伝わせてもらった。女は入れないという機関室にも「あんたはいいだろう」と入れてもらって、焼玉エンジンの始動の仕方など習った。操舵輪に腕をさしこんで全身でぐるぐる回す舵取りもさせてもらったし、甲板磨きや、航行中の船の二階から欄干を伝って船の外側から一階に下りることなど様々な水夫の仕事を教えてもらった。

このガイドは好評で大学に進学した後、一年次の夏休みにも頼まれて帰省して働き、二年次には船も二隻になって専門のバスガイドが派遣され、私は指導役になった。私は与謝野晶子の和歌や頼山陽の漢詩を朗詠するだけだったが、彼女らは歌も歌った。

このアルバイト代は高校生としては高額で、私はそれを修学旅行ではなく、受験の費用にあてた。修学旅行には行かなかった。多分その間に、僅かながら受験勉強をしたのだろう。この船会社が「南国殖産」で高校卒業後、採用してくれることになっていたのだ。例えこの会社に就職する運びになっても、「自分」という枠からは抜け出せず、大差のない人生を送ったことだろう。その「自分」という枠組みは、高等学校生活までの間に、基盤の大枠の形は出来上がったのだと思う。

## V あとがき

本稿は、山口康子個人の記憶のみを辿って記述したものである。昭和を綴る参考文献は何一つ参照しなかったし、同趣の記録にも一切目を通してない。私の中では確固たる事実、ゆるぎのない真実のみを記した。少しでも記憶の曖昧な事柄や、明確には思い出せない名前などは割愛した。先生方のお名前などすべて実名であるが、ご了承を得ようにも誰一人、もはやこの世に居られない。学友の大半も世を去った。

一児童・一生徒の記憶だけでは正確かつ公平な事実とは言えない。せめて教えられる立場だけでなく、教える立場の教師や戦後の教育活動を支えたPTAの役員たちの記憶と重ね合わせるべきであろう。又、亡母の遺品の中に在った私たちきょうだいの通知表や運動会などのプログラム等、若干たりとも物的傍証と照らし合わせれば、いくらか確実性が増すかもしれない。しかし、今は、それらを再び取り出して付載する気力・体力ともに失っている。

それにも拘らず、あえて稿を起こしたのは、ひとえに上菌恒太郎先生のご熱意—長崎大学教育学部の元同僚、現在、長崎総合科学大学長崎平和文化研究所所長の強いお勧めによる。私のささやかな記憶が、戦後の混乱の中でほぼ唯一の希望の光だったとも考えられる新制度の学校教育の状況の一部分でも伝えることが出来ていることを切に望みつつペンを置く。

(2023年12月10日)

※もし、叶うならば、お目通し下さった皆様のご感想・ご所見を承りたいものと、切望いたします。